ムサビの教員が選ぶ
美大生におすすめの映像資料
Recommended film for art students.

共通彫塑研究室
戸田裕介教授

念のためおことわりしておきます。私は映像の専門家ではありません。映像の「良し悪し」は判りません。美大教員とは言っても彫刻家の私がみなさんにおすすめできる「映像」はこれまでにたまたま観たものの中から趣味的に選んだものでしかありません。「ちょっと観てみたら、面白いかも」と軽い気持ちでタイトルをあげます。

『奇跡の丘』

制作者：ピエル・パオロ・パゾリーニ

公開：1964 年

この映画のキリストは左右の眉毛が眉間でつながっちゃってる。確かによく考えれば西洋絵画や西洋彫刻が描いてきた白肌カーリーヘアに碧眼の西洋人風の容姿をしたキリストは奇妙（ヘン）だ。だってキリストは（イスラエル占領下の）ヨルダン川西岸のベツレヘム生まれなのだ。現代では「中近東出身のイエスはユダヤ系やアラブ系の多くの男性同様に褐色の肌に茶色い目をしていた可能性が高い」と言われる。

パゾリーニがこの作品を撮影した頃、救世主の人種問題があったのかどうかは知らない。知っているのは、リアリズムを追求するパゾリーニは無神論者で、出演者の多くは素人だったらしい。けれど、そんな舞台裏のうんちくは直接感情に訴えてくる物語と映像を観ているうちにどうでも良くなってしまう。

『クリスマスキャロル』

制作者：ロナルド・ニーム

公開：1970 年

チャールズディケンズの名作中編小説『クリスマス・キャロル』をミュージカル仕立てにした 1 本（ちなみにディケンズは大長編小説を得意とした作家だ）。イギリス人俳優アルバート・フィニー（撮影当時：34 歳!）が主人公スクルージを青年から中年・老年に至るまで名演技で演じ分ける。印象的に耳に残るたくさんの楽曲で彩られたミュージカルは豊かで華やかだ。楽しいシーンは一層楽しく、悲しいシーンはより悲しみが増す。きっと『スクルージ』を鑑賞し終えた後の気分は晴れやかで気持ちが良い、きっと誰もがしばらくのあいだすごく善い人になる。観終わったあと制作しながら思わず口ずさんでしまう歌があるかも。

『U ボート』

制作者：ウルフガング・ペーターゼン

公開：1981 年

乗組員 4 万人のうち 3 万人が戦場（海中）に散ったナチスドイツの軍用潜水艦 U ボート。軽快な音楽とともに颯爽と荒波をかき分け進撃する姿やその活躍が溌剌と描かれ・・・ネタバレになるのでストーリーは書けません。私が好きなのは本編が始まって長いテロップのあと。何も無い緑色の海中の映像が画面一杯に広がるところから。私の目は焦点を合わせるべき対象物を探して視点が画面上を動き回る。靄がかかった海中映像だけがしばらく微かにうごめいている。その緑色の靄の真ん中から U ボートの船影が徐々に現れ、そして一気に巨大な鯨のような船底を見せながら上方に抜けてゆこうとする、一旦真っ暗になったスクリーンに、タイトル "Das Boot" のロゴが灯って、そして消える。『U ボート』の製作意図はこの約 1 分間の映像に集約されているように思う。こんな感じの視覚効果を彫刻では作れないのか? 40 年以上時々思い出しては今も考えている。

『世にも怪奇な物語』

制作者：ロジェ・ヴァディム / ルイ・マル /
フェデリコ・フェリーニ

公開：1967 年

「不条理」。そんな言葉も意味も知らなかった小学生のとき、自分以外の家族がみんな外出して一人ぼっちで留守番した日の午後、テレビでたまたまこの映画を観た。当日は見たと言うより運悪く観ててしまったという感じだったが私は独占できたチャンネルを一切 " 回せなかった "（当時のブラウン管テレビには取っ手付きのダイヤルが画面下の枠についていてそれをガチャガチャと回してチャンネルを切り替えた）。3 本立ての短編はどれも怖い話しばかりで私はテレビの前に釘付けになってしまった。中でも、特にフェデリコ・フェリーニの『悪魔の首飾り』はその晩夢にまで出てきた。怖いぞ〜。

『Powers of Ten』

制作者：チャールズ・イームズ / レイ・イームズ

公開：1977 年

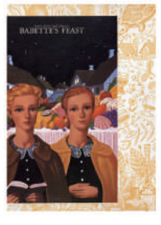
建築や家具を中心に佳作傑作を数多く残したインダストリアルデザイナーイームズ夫妻が製作した科学教育的映像である。この映像が製作された 1970 年代と異なり、今は特殊撮影や視覚効果がふんだんに用いられた CG を見ることが日常的になったが、シンプルな思考と発想を基にフレームコントロールだけでつくられた『Powers of Ten』の（アナログって言って良いのか?）映像は色褪せないどころか観るたびに新鮮な驚きがある。効果音もシンプルで秀逸だ。説明の必要はないかもしれないが、タイトル『Powers of Ten』は、"10 の威力 " ではなく "10 の冪乗（べきじょう）／ x 乗 " だ。念のため。（日本語訳のナレーションは名優：江守徹）

* 吹替：江守徹氏については、LD 資料にクレジットの記載があります。

『バベットの晩餐会』

制作者：ガブリエル・アクセル

公開：1987 年



デンマーク辺縁の小さな漁村、厚い信仰のもと未婚のまま質朴な生活を送る初老の姉妹。嵐の夜に訪ねて来て姉妹の家政婦となったフランス人女性との静かな生活が描かれる。この映画に大がかりなスペクタクルなシーンはほぼ無い（" ほぼ無い " と言うことはアルと言うこと。ウミガメとウズラかな?）が、見終わったあとになってじわじわじわじわ心に染みてくる映画である。食事の情景が多いこの映画には " 干し鱈と固くなったパンを水とビールで戻してドロドロに煮込んだ食べもの " が出てくる。食い意地が人一倍張っている私でさえ食べてみたいと思わない希有な食べものの姿は結構グロい。脱線ついでに言うとアメリカでほぼ同じ材料でつくられたと思われる " ビールパン " なるものを食べたことがあるが姿形が全く違った。味はどうなんだろう?

ムサビの教員が選ぶ
美大生におすすめの映像資料
Recommended film for art students.

共通彫塑研究室
戸田裕介教授

念のためおことわりしておきます。私は映像の専門家ではありません。映像の「良し悪し」は判りません。美大教員とは言っても彫刻家の私がみなさんにおすすめできる「映像」はこれまでにたまたま観たものの中から趣味的に選んだものでしかありません。「ちょっと観てみたら、面白いかも」と軽い気持ちでタイトルをあげます。

『闇・光・闇』

制作者：ヤン・シュヴァンクマイエル

公開：1989 年

この人は彫刻やオブジェもつくればドローイングも描く多彩な活動をするチェコ人アーチストである。中でもアニメーション作家、映像作家、映画監督として製作した作品は特にユニークだ。今回このコラムで 1981 年の作品『対話の可能性』（14 分）とどちらをおすすめしようか迷った。『Oscuridad, Luz, Oscuridad』は 7 分 30 秒。英訳タイトルは『Darkness, Light, Darkness』。ほかにもアニメと実写を組み合わせた『アリス』（1988 年）や『オテサーネク 妄想の子ども』（2000 年）など。共産主義から民主主義に転換した 1989 年のチェコの政治革命を挟んで製作された様々な作品は何れも興味深い。

『A Year Along the Abandoned Road（『見捨てられた道沿いの1年』_戸田訳）』

制作者：モルテン・スカレルド

YouTube で視聴可

この映像は素朴な風情と懐かしさと美しさと自然への敬意や郷愁で満ちている・・・が、その撮影方法がヤバい。私は彫刻家としてこれまでけっこう面倒な制作や作業を経験してきた。時には身体を壊しながらでもひとつの彫刻に半年 1 年を費やして制作することもある。だからたいていの面倒な作業や仕事は厭わない。そんな私でもこの映像の撮影方法を知ったときには「本当にやったの?」とか「本気で続けられたの?」と呆れてしまった。もう少し正確に言うと呆れが最初に来て尊敬と礼賛があとから来た。撮影に費やされた労働の時間とその積み重ねで獲得した密度の高い濃厚な映像の高い質は、撮影手法と完全に一体化して、この作品全編から震えながら揺らぎながら律動しながら滲み出している。

撮影方法が見られる URL を下に貼り付けておく

https://www.nordische-filmtage.de/en/programm/movie/view/2015/6792.html

『少林サッカー』

制作者：チャウ・シンチー

公開：2002 年

とにかく笑える。この映画は笑うためにある。初めて観たときには「これってマジメにつくったの?」「ふざけて遊んでいるうちに出来ちゃった?」なんて思ったほどだ。今回このコラム執筆に際して調べたら、製作費を 15 億円近く（1000 万アメリカドル）使ってつくられ、28 億円（一説には 35 億円）の興行収入があった大ヒット映画であったと知り再びビックリした。『ハリー・ポッターと賢者の石』を押さえて 2001 年の興行成績 1 位だったという記事もみつけた。

面白くないことが続いたときや気分が落ち込んだとき観ると良いかも。この映画を観れば、きっとたいていのことはどーでも良くなる? “少林拳はサイコ〜”

『花筐 /HANAGATAMI』

制作者：大林 宣彦

公開：2017 年

2018 年秋、本学の課外講座に大林監督をお招きした。招聘条件は「受講する方は当日までに『花筐 /HANAGATAMI』を必ず観てください」だった。前々年に医師から末期がん余命半年の宣告を受けられ『花筐 /HANAGATAMI』の完成は叶わないかもしれないとの状況をはねのけ本作を撮り終えられ公開からまだ 1 年足らずの時期だった。満員の講義室でお話し頂いたあと酒席をご一緒させて頂いた。「大理石の彫刻を谷底に突き落としたら崖を転がり落ちながら腕が折れ、頭が取れて、ローブやマントの襞が欠けて蛇足の無い彫刻の美が生まれるでしょう? ぼくもね、映画を谷底に突き落とせないか考えるんです。」と仰った。その真意はもうわからない。私には『花筐 /HANAGATAMI』は逆に彫って彫って彫りまくってもう石が壊れそうなのに構わずこれでもかと細部を彫り進められた作品のように見える。しかも鑑賞者側は更にイメージを補いながら観ている気がする。まだ観たりないのかも。

『マロナの幻想的な物語』

制作者：アンカ・ダミアン

公開：2020 年

＂マロナ＂は犬だ。マルチーズではない・・・ん〜、やはりもう書けない。ネタバレしないストーリーの紹介って難しい。

このアニメーションは動くアラベスク模様だ。構成、細部、色、形、全ての遠くの模様と近くの模様が結びつき、エネルギーを分かち合って、反復や渦巻きや上下運動や左右への振り子運動や万華鏡的回転を繰り返しながら次々に関連づき響き合っている。イスラム教寺院に見られるアラベスクは全体と細部が密接に結びついた半ば抽象図像であるが、このアニメーションでも色や形だけでなく、親子関係や飼い主との経験で得られる繋がりも含めて全てのことが生命の連続や連環と捉えられている。

このアニメーションでは、美的な映像表現も意味を担うストーリー展開も、具象的な仮想の姿をまとった抽象世界だと捉えられているように見える。おそらく私たちは宇宙という巨大なアラベスクの中の 1 本の蔓（ツル）模様か、一枚の小さな葉っぱの模様なのだ。